
沖縄離島の歴史的町並みと観光

——竹富島および渡名喜島を事例として——

今 村 洋 一

第1章 はじめに

1.1 背景と目的

歴史的町並みを保全し、それを観光資源として売り出し、観光客を呼び込んで、地域の存続を図る。歴史的町並みが残されている地域では、生き残りをかけて、こういった戦略がとられることが多いし、また、期待した効果を得ることができている地域もある。しかし、歴史的町並みがあっても観光振興がうまく進まず、思うように観光客を呼び込めない場合もあれば、観光振興は進んだもののそれが行き過ぎてオーバーツーリズムや観光公害に見舞われてしまう場合もある。観光による弊害を如何に回避したうえで、観光振興を図るかが、課題となっていると言えよう。

本稿で扱う竹富島と渡名喜島は、どちらも国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された歴史的町並みを有する沖縄の小さな離島である。しかし、観光の実態や観光まちづくり上の課題はまるで違う。島へのアクセスのしやすさが、この差を生む大きな要因ではあるが、現地調査とヒアリング調査を通して、観光まちづくりの取り組み実態の違いについて、観光振興、観光開発への対応、観光資源のマネジメントの3点から明らかにしたい。

1.2 研究方法

観光まちづくりの取り組み実態に焦点を当てる

本研究では、竹富島、渡名喜島ともに、現地調査とともに、全体を俯瞰できる方にヒアリング調査をおこなうこととした。竹富島に関しては、NPO法人たきどうんの阿佐伊拓氏（竹富島を守る会会長でもある）に対し、令和元年（2019）10月19日（於：西表石垣国立公園竹富島ビジターセンター「竹富島ゆがふ館」）、渡名喜島に関しては、渡名喜村経済課の桃原望氏に対し、同年10月18日（於：渡名喜村役場）にヒアリング調査をおこなった。

第2章 竹富島の歴史的町並みと観光

2.1 竹富島の位置とアクセス

竹富島は八重山諸島の中心である石垣島の南海上約6kmの位置にある周囲約9kmの小さな離島で、かつては農業、今は観光業が主要産業である。石垣港離島ターミナルから、日中30分間隔で出港する定期高速船（八重山観光フェリー、安永観光）に乗船すれば、片道約15分で到着するため、石垣市街からのアクセスは非常によい。そのため、観光客だけでなく、竹富島で働く人の中にはこの定期船を利用して、石垣島から通う人も多いという。

竹富島へのアクセスは石垣島が起点となるが、平成25年（2013）に石垣空港が拡張オープンしてからは、主要空港（羽田、成田、中部、関西、福岡）からの直行便が増えたほか、那覇空港経由



図1 竹富島重要伝統的建造物群保存地区と集落構成

出典：文化庁編（2015）「歴史と文化の町並み事典」学芸出版社、235頁

の便も相応にあり、遠方から石垣島へのアクセスは近年、向上している。

2.2 竹富島の人口推移

竹富島では、昭和35年（1960）に843人であった人口が、若年層の流出に伴って、その後の約10年で300人台にまで落ち込むという急速な人口減少に見舞われた。その後も人口は漸減し、平成期の前半（1989～2001）は300人を割り込んでいた。竹富島の魅力が知られるようになると、観光客が増加するとともに移住者（Iターン）も増加し、島の人口は緩やかな回復傾向へと転換した。現在の人口は353人（令和2年9月末現在）である。

2.3 竹富島の歴史的町並み

竹富島の集落は、島の中央にまとまっており、その周囲は樹林地や農地となっている。集落内の

通りには厚く白砂が敷き詰められ、敷地は珊瑚石灰岩の石垣で囲まれている。敷地内には、フーヤと呼ばれる主屋が中央に建てられ、フーヤの前にはマイヤーシと呼ばれる目隠し壁が設けられている。フーヤの他には、トーラ（炊事棟）やオーシ（豚小屋）、物置などが敷地内に配置され、フクギなどの屋敷樹も植えられている。伝統的家屋であるフーヤは、寄棟造の平屋建で、勾配の緩い屋根には赤瓦が葺かれ、白漆喰で固められている。かつては茅葺であり、明治後期以降に現在の赤瓦葺へと変わっていったようである。

赤瓦の伝統的家屋の並ぶ3つの集落（東、西、中筋）が、昭和62年（1987）に国の重要伝統的建造物群保存地区（約38.3ha）に選定された歴史的町並みである（図1）。珊瑚石灰岩の石垣と、その石垣越しに見える赤瓦の屋根が印象的である（写真1）。国の重要文化財に指定されている旧与



写真1 竹富島の集落



写真2 旧与那国家住宅（国指定重要文化財）

那国家住宅（大正2年築、写真2）をはじめ、伝統的建造物として建築物112件と工作物969件、さらに環境物件113件が保存対象となっている。

2.4 竹富島における観光

昭和47年（1972）の本土復帰以降、平成10年（1998）頃までは、年間約5～10万人の観光客数で推移していたが、その後、急増して、近年は年



写真3 高速船で押し寄せる観光客



写真4 観光客で賑わう食事処

間約50万人が訪れるようになっている。単純に365日で割っても、1日当たり1,300～1,400人の観光客数となり、人口の約4倍という驚くべき数字である。現在は、高速船が到着するたびに大勢

の観光客が押し寄せ、昼時の食事処はどこも満席、島じゅうが観光客だらけといった印象である（写真3、4）。面積も人口も小さな竹富島で、これだけの観光客数を受け入れるのは、キャパシティと

して限界であり、これ以上増やせる余地はないという。

竹富島観光のハイライトは、赤瓦の伝統的家屋が並ぶ集落であり、訪れた観光客は散策したり、集落をのんびり巡る水牛車に揺られたり、思い思いの時間を過ごす。集落を一望したい時は、これまで展望台として機能してきたなごみの塔が老朽化のため立ち入り禁止となっているので、近接する住宅の屋上に上がることになる(有料で公開)。また、鳴き砂で有名なカイジ浜、白砂のコンドイ浜と夕日のきれいな西栈橋も、多くの観光客が訪れる場所である。限られた時間にこれらを効率よく巡りたい観光客は、レンタサイクルや巡回バスを利用している。

竹富島へのツアー企画は、主に島外資本の旅行エージェントによるもので、八重山地方の中心である石垣市を起点として日帰りで訪れるツアーや、八重山の島々を巡るホッピングツアー¹⁾が人気で、これらの場合の滞在時間は2時間程度だという。このような通り一遍のマスツーリズムが見られる一方で、宿泊して島の自然や文化をゆっくり味わう観光客も一定数おり、民宿では毎晩のように、島民と観光客がお喋りをしたり唄を歌ったりと、楽しい交流が図られている。

2.5 竹富島における観光振興の取り組み

後述するように、リゾート開発を目論む島外資本を排除し、島民による身の丈に合った観光振興を目指している。町並み保存運動を展開するなかで、町並み保存と観光振興の両立を成し遂げている長野県の妻籠との交流が活発におこなわれ、妻籠を師とした取り組みがおこなわれている。伝統文化と自然環境を次代に豊かに継承することを謳い、島民が守るべき基本理念を定めた竹富島憲章も、妻籠の住民憲章を参考に制定されたものである。観光資源である歴史的町並みの保全を優先したうえで、島民自らが観光事業に乗り出している。宿泊施設²⁾や食事処が多くあるほか、竹富観光の

目玉ともなっている水牛車を運行する事業者が2軒、集落やビーチを効率よくまわるためのレンタサイクルの事業者4軒、竹富港ターミナルと集落やビーチを結ぶ巡回バスの事業者1軒があり、観光客を受け入れている。また、島周辺の珊瑚の海と熱帯魚を鑑賞できるグラスボートを運行する事業者1軒もある。なお、島民の7割が直接的・間接的に観光業と関りがあると言われている。

平成24年(2012)には、集落から約1km南東に離れた土地(約6.7ha)に、赤瓦の伝統家屋を模した50棟のラグジュアリーホテル「星のや竹富島」がオープンした。ハイクラスの高価格帯の宿泊施設であるため、島民の経営する民宿と客層はバッティングすることはなく、竹富島として宿泊施設の多様化が図られたと言える。宿泊施設のキャパシティは、島全体で400人超であり、島民人口をやや上回る程度の宿泊者を受け入れることができる状況にある。

近年は、観光客が増加したこともあって、旅行エージェントから送り込まれた観光客を捌くだけで手いっぱいになりがちだが、竹富島ならではの取り組みが必要との認識から、たきどうんでは、島ぞうりを履き、島民ガイドの案内で集落を歩く体験プログラム(通称:素足ツアー)の催行や、特産品の開発販売などもおこなっている。

2.6 竹富島における観光開発への対応

昭和47年(1972)の本土復帰の際、観光開発を目論んだ島外資本によって、島の1/5の土地が買われてしまった。それに危機感をもった島内外の有志は、「竹富島を守る会」や「竹富郷友会」を設立し、島外資本による観光開発反対運動が展開された。反対運動の中で、昭和53年(1978)に竹富島憲章(「売らない」「汚さない」「乱さない」「壊さない」「生かす」)の原案が作成され、これを掲げて観光開発を阻止してきた。なお、この憲章は、昭和62年(1987)に明文化された憲章として制定されている。反対運動をしながら、島外



写真5 竹富島ビジターセンター「竹富島ゆがふ館」

資本に買われた土地を買い戻すことも進められたが、買い戻した土地をどう活用するかが、今でも課題となっている。なお、前述の「星のや竹富島」は、島外資本に買われた土地の活用策としておこなわれた観光開発事業である。土地は、島内の有力者と星野リゾート代表の星野氏が共同代表をつとめる(株)竹富土地保有機構が所有し、星野リゾートに賃借する形態をとっている。星野リゾートも島外資本ではあるが、竹富島のまちづくり理念を理解し、竹富島の暮らしを守ることを前提として、受け入れることになったという。

一方、平成26年(2014)、沖縄本島の事業者から、コンドイビーチ近くでのリゾートホテル計画(約2.1ha)が発表されると、反対運動が起こった。行政上の手続きは全てクリアしているというが、島民との軋轢から事業は進展していない。

2.7 竹富島における観光資源のマネジメント

竹富島最大の観光資源は、島中央にある伝統的

な赤瓦の古民家が並ぶ歴史的町並みである。重要伝統的建造物群保存地区となっており、伝統的家屋の修理、珊瑚石灰岩の石垣の修理や復元が、保存計画に従っておこなわれている。112件の保存物件のうち、約8割が修理事業を終えているが、近年もフーヤ(主屋)1～2件/年の修理が続けられている³⁾。また、伝統的家屋の古材をストックして修理の際に活用できるよう、石垣島で伝統的家屋が解体される際には、竹富島の大工がそこへ行って、使用可能な古材を集めてくることもおこなわれている。

竹富島では、全世帯が加入する自治組織である竹富公民館が、観光まちづくりも含め、島の運営をおこなっているが、島内にある文化財の保護や伝統文化の継承を目的として、平成14年(2002)にはNPO法人たきどうんが設立された。たきどうんは、専従スタッフを擁し、島内の文化遺産の管理のほか、港の待合室である「てえどうんかりゆし館」や事務所を置く竹富島ビジターセンター「竹富島ゆがふ館」の管理もおこなっている(写真5)。



写真6 券売機を利用する観光客（石垣港離島ターミナル）

また、令和元年（2019）9月から、竹富島を訪れる観光客から任意で、入域（島）料として1人当たり300円を徴収している。地域自然法に基づく環境税の一種であり、竹富島地域自然資産財団が事業委託を受けて実施している。この協力金は、島の自然環境の再生や保全のほか、島外資本に買われた土地を買い戻す資金にも充てられる。当初は、竹富島航路の船舶運賃に組み込むことを想定していたが、事業者との調整がつかずに断念し、石垣港離島ターミナルと竹富港ターミナルの双方に券売機を設定して徴収している（写真6）。開始から約1か月経過時点での徴収率は、1割強程度しかなく、周知が進んでいないためなのか運用実績は厳しい⁴⁾。

第3章 渡名喜島の歴史的町並みと観光

3.1 渡名喜島の位置とアクセス

渡名喜島は沖縄本島的那覇市の北西海上約54kmの位置にある周囲約13kmの小さな離島であり、農業と漁業が主要産業である。那覇市泊港から1日1便の定期フェリー（久米商船：渡名喜島経由久米島行き、定員350名）に乗船すれば、片道約2時間で到着する。往路と復路の発着時間の関係で、那覇からの日帰りは不可能で必ず渡名喜島で宿泊する必要がある。ただし、4～10月の金曜日のみ午後の復路があり、この時だけ日帰りが可能となっている。那覇から1日1便で約2



図2 渡名喜島重要伝統的建造物群保存地区と集落構成
出典：文化庁編（2015）「歴史と文化の町並み事典」学芸出版社、233頁

時間というアクセスの悪さと原則、宿泊が必要という利便性の悪さから、後述するように、渡名喜島を訪れる観光客は僅かである。

3.2 渡名喜島の人口推移

渡名喜島では、昭和25年（1950）に1,601人でピークを迎えた人口が、若年層の流出に伴って昭和40年代に激減し、昭和50年（1975）には721人となった。その後、一時はUターン者によって増加した時期もあったが、長期的には減少傾向が続き、現在の人口は355人（令和2年2月末現在）である。

3.3 渡名喜島の歴史的町並み

渡名喜島の集落は、島の中央に東岸から西岸まで一続きでまとまっており、その周囲は農地となっている。集落内の通りは、およそ東西方向と

南北方向で構成され、白砂が敷き詰められている。敷地地盤は通りより約1m低い位置にあり、テーブル珊瑚もしくは珊瑚石灰岩の石垣で囲まれ、その内側にフクギの屋敷樹が植えられている。南側の入口から石段を降りて敷地に入る構成となっており、入口正面にはソーンジャキと呼ばれる石造の目隠し壁が設けられている。主屋は、寄棟造の平屋建で、勾配の緩い屋根には赤瓦が葺かれ、白漆喰で固められている。沖縄共通の赤瓦の伝統家屋と言えよう。ただし、他の地域と異なり、主屋の中に炊事室が作られている点が特徴である。

赤瓦の伝統的家屋の並ぶ集落全体が、平成12年（2000）に国の重要伝統的建造物群保存地区（約21.4ha）に選定された歴史的町並みである（図2）。緑濃いフクギの木陰と、そのフクギを通して透けて見える赤瓦の屋根が印象的である（写真7、8）。伝統的建造物として建築物104件と工作物204



写真7 フクギに守られた渡名喜島の集落



写真8 フクギを透かし見る伝統的家屋

件、さらに環境物件224件が保存対象となっている。保存対象とされる建築物の数では、竹富島とほとんど遜色ない。また、環境物件が多いのは、フクギの屋敷林が保存対象として指定されている

ためである。

3.4 渡名喜島における観光

渡名喜村提供資料によれば、平成30年（2018）

の乗船観光客⁵⁾は1,290人と非常に少ない。過去4年間では、平成28年(2016)の1,523人が最多であり、島を訪れる観光客は増加傾向にない。なお、フェリーを利用せず、チャーター船で来島する観光客も僅かながらおり、20名程度で年数回という。

フェリーで渡名喜島を訪れる場合、ハイシーズンの金曜日以外は、那覇市泊港からの日帰りは不可能であり、宿泊が必須となるが、観光客が宿泊できる施設は非常に少ない。伝統的な赤瓦の古民家6棟を活用した「赤瓦の宿ふくぎ屋」のほか、コンクリート造の民宿が3軒(うち1軒は休業中)のみであり、渡名喜島に宿泊できる人数は最大でも30人程度と限られている。夏休み期間などは、自分で宿泊施設を確保できず、どこか泊まることのできる宿がないか、よく役場に問い合わせがあるようで、宿泊施設の少なさは観光客が増加しない一因となっている。

島を訪れる観光客はリピーターが多いと認識しており、そのような観光客は、島でアクティブに過ごすというよりは、何もせず、のんびり静かに過ごす傾向があるという。赤瓦の伝統家屋の並ぶ静かな集落を散策し、フクギのトンネルを抜け、あがり浜で海を眺める。また、アンジェラ浜やフェリー乗り場付近で、ウミガメを見かけることも多いという。なお、日帰り可能なハイシーズンの金曜日であっても観光客はまばらで、島はいつものように静かなままである。

3.5 渡名喜島における観光振興の取り組み

渡名喜島では、渡名喜島観光の窓口となる渡名喜村観光協会が平成30年(2018)に設立されるなど、最近になって、ようやく観光振興に力を入れ始めた。フェリー乗り場の目の前、渡名喜村役場に隣接した場所には、渡名喜村観光案内所(令和2年(2020)オープン)が建設され、今後、この観光案内所内には飲食店もできる予定である。このように、まだ緒に就いたばかりの観光振興であるが、渡名喜村では、重要伝統的建造物保存地

区にも選定されている集落を含め、島をまるごと味わってもらような観光スタイルを考えているという。何らかのアクティビティを提供するという方向ではなく、渡名喜島でのんびりしたい、美しい写真を撮りたいなど、自分で時間を使える人が渡名喜島観光のターゲットとなる。また、冬場の観光客が少ないため、通年型の観光を目指したいとしている。

外部との連携については、具体的な動きはない。ただ、県民を対象としたモニターツアーの割引(半額)をする沖縄県の補助事業「島あっちい」がおこなわれており、渡名喜島も対象となっている。うちなーんちゅのための体験型離島モニターツアーと銘打たれた離島観光・交流促進事業で、沖縄県内の離島の観光振興を図ることが目的である。例えば、平成29年度(2017)事業では、1泊2日で、山菜採りと料理、干物づくり、ウミガメ観察をおこなう体験プログラムが実施された⁶⁾。

3.6 渡名喜島における観光開発への対応

宿泊事業や飲食業などの観光事業を営む島民は非常に少なく、観光客がお金を落とすような場所や施設も今のところない。島民に、島を訪れる観光客を対象に何か事業を興していこうという考えがあまりないという。伝統的家屋である赤瓦の古民家は空き家となっているものも多く、不足する宿泊施設や飲食店として活用したいというが、現状は、年に数回、帰島する親類が使用するだけで、活用は進んでいない。

島外の観光事業者からの参入の相談もほとんどない。平成30年(2018)にはダイビングショップを渡名喜島で開設したいという相談があり、空き家を活用する調整までしていたが、立ち消えとなった。

現状では、島民が観光まちづくりに関わる体制は整っていない。渡名喜村としては、観光協会や地域おこし活動(手作りの特産品開発、集落の案内ガイドの養成など)を通して、観光客の受け入



写真9 集落内のブロック塀

れに携わる島民を増やしていきたいと考えている。

3.7 渡名喜島における観光資源のマネジメント

渡名喜島最大の観光資源は、伝統的な赤瓦の古民家が並ぶ歴史的町並みである。その集落全体が重要伝統的建造物群保存地区内にあるため、伝統的家屋の修理、珊瑚石灰岩の石垣の修理や復元、屋敷林であるフクギの保全が、保存計画に従っておこなわれている。保存物件のうち約7割が修理事業を終えている⁷⁾が、コンクリート造の非伝統的家屋やブロック塀など、修景が必要な箇所も多く、今後の修景事業で景観の改善が進むことが望まれる(写真9)。

集落内にめぐらされた白砂敷きの通りは、掃き掃除をする習慣が住民に根付いているのと、小学生が朝起き会のラジオ体操後に掃き掃除をしているため、非常にきれいに保たれている(写真10)。非舗装であるため、窪みが生じることもあるが、そういった場合は、適宜、役場経済課の職員が補修をおこなっている。

第4章 まとめ

4.1 竹富島と渡名喜島の観光まちづくり比較(表1)

島民人口がほぼ同じ竹富島と渡名喜島であるが、観光の起点となる場所からのアクセスのよい竹富島では観光地化が進み、アクセスのよくない渡名喜島では従来のように農業と漁業で暮らしている。年間観光客数では、約400倍もの差がついている。

本土復帰の頃から、観光開発を目論む島外資本に狙われている竹富島では、観光資源である歴史的町並みの保存を優先させたうえで、島民自ら観光振興に取り組んできた。観光客は増えたが、次々と訪れる短期滞在の観光客を捌くのに手いっぱいといった状況で、これ以上の受け入れはできないといったところまできている。持続的な観光の実現のために、島の遺産を如何に保全するかが改めて観光まちづくりの課題となっており、NPO設立や入



写真10 朝起き会後の掃き掃除のための箒

表1 竹富島と渡名喜島の比較

	竹富島	渡名喜島
人口・産業	<ul style="list-style-type: none"> ・約350人 ・観光業の島 	<ul style="list-style-type: none"> ・約350人 ・農業、漁業の島
アクセス	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣市から高速船で約15分 ・日中は30分おき 	<ul style="list-style-type: none"> ・那覇市からフェリーで約2時間 ・1日1便(4～10月の金曜以外は日帰り不可)
観光実態	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客数：年間約50万人（ほぼ限界との認識） 	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客数：年間1,200～1,500人 ・1泊してのんびり過ごすスタイル
観光振興	<ul style="list-style-type: none"> ・2時間程度で効率よく島内を巡るスタイル ・本土復帰後から取り組む ・島内事業者が主体となって、宿泊、飲食だけでなく、水牛車、レンタサイクル、巡回バスなど、多様な展開 ・宿泊キャパシティは400人超 	<ul style="list-style-type: none"> ・近年になってようやく取り組み始めた（観光協会の設立、観光案内所の設置） ・島内事業者が主体だが、宿泊、飲食が僅かにあるのみ ・宿泊キャパシティは30人程度（ハイシーズンは不足） ・島外事業者からのアプローチほぼ無し
観光開発	<ul style="list-style-type: none"> ・町並み保存を優先（憲章） ・島外事業者を原則排除（星のやは例外的） 	<ul style="list-style-type: none"> ・約20年、重伝建地区として修理（7割済み）・修景が進む
観光資源のマネジメント	<ul style="list-style-type: none"> ・30年以上、重伝建地区として修理（8割済み）・修景が進む ・NPOによる遺産管理 ・入島料の徴収（任意收受・協力金） 	<ul style="list-style-type: none"> ・通りの清掃や補修は島民・役場職員が実施

島税の導入など、組織的、制度的な取り組みで乗り越えようとしている。

一方、島外資本による観光開発の話もほとんどない渡名喜島では、時折訪れる観光客相手の商売は発展することなく、島民によって細々と営まれている。しかし、農業と漁業とで生計を立ててきた島の暮らしも、今後の先行きが分からないなかで、観光振興に取り組む必要性を認識し、観光協会の設立や観光案内所の設置など、ようやく観光客受け入れの準備に着手した。各島民と役場の個別の取り組みから、組織的な取り組みへの変革期にある。

4.2 おわりに

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、観光を取り巻く情勢は一変した。特に、医療体制の脆弱な離島においては、観光客によって島内に新型コロナウイルスが持ち込まれることを極力避けねばならない。そのため、Go toキャンペーンが開始された以降も、来島自粛の要請や、感染防止のための健康観察の要請がおこなわれている。今や観光業が主力産業となっている竹富島では、観光客の激減が死活問題となっているだろう。一方で、懸念されたオーバーツーリズムの問題はいったん消滅した。新型コロナウイルス感染症の流行が収束するのか、日常的に存在するウイルスとして長く付き合っていくことになるのか分からないが、この機会に、観光まちづくりの戦略を練り直し、来るべき新たな時代の新たな観光に備えていく、いや、新たな観光を創っていくことが、本稿の対象である竹富島においても、渡名喜島においても重要になるのではないだろうか。

本稿は令和元年度学園研究費助成A「交流の時代における観光とアートのまちづくりに関する研究」(代表:木田勇輔)の成果の一部である。また、ヒアリング調査にご協力いただいたNPO法人たきどうんの阿佐伊拓氏、渡名喜村経済課の桃原望

氏にお礼申し上げたい。

注

- 1) ツアーだけでなく、個人旅行者も八重山諸島をまわれるよう3～5日間の乗船フリーパス(アイランドホッピングパス)が販売されている。
- 2) 民宿がメインであるが、小規模なホテルや旅館、ゲストハウスもある。20軒以上。
- 3) 文化庁HP内の竹富町資料によれば、令和元年度(2019)までに、フーヤ(主屋)56件、トーラ(付属舎)34件、御嶽1件、案内板2件の修理事業がおこなわれた。(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/hozonchiku/pdf/r1392257_117.pdf, 2020.10.15閲覧)
- 4) 入島税のうち1/3を土地の買い戻しに使用できる枠組みとなっている。徴収率については、八重山毎日新聞Web版(2019.10.12 <http://kyodoshi.com/article/5350>)による。
- 5) 乗船観光客とは、フェリーに乗船して島を来訪した人のうち、観光目的であった人のこと、乗船観光客に仕事関係や島民の往来も含めれば、年間4～6千人が渡名喜島に出入りしているという。
- 6) 沖縄県民のおでかけを応援するサイト「ちゅらとく」による。(https://www.churatoku.net/info/0001033.aspx, 2020.10.15閲覧)
- 7) 文化庁HP内の渡名喜村資料によれば、平成29年度(2017)までに、79件の修理事業がおこなわれた。(https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/hozonchiku/pdf/r1392257_116.pdf, 2020.10.15閲覧)

参考文献

- 文化庁編(2015)「歴史と文化の町並み事典」学芸出版社、232-235頁
- 西村幸夫・埜正浩編著(2007)「証言・町並み保存」学芸出版社、199-219頁
- 池ノ上真一(2012)「地域社会による文化遺産マネジメントとツーリズム——沖縄県・竹富島の事例研究」北海道大学観光学高等研究センター
- 藤井絃司(2018)「観光まちづくりをめぐる地域の内発性と外部アクター——竹富公民館の選択と大規模リゾート」観光学評論、vol. 6-1、3-17頁

いまむら・よういち / 文化情報学部准教授
E-mail : y-imamura@sugiyama-u.ac.jp